

ミレニアム特集

20世紀～21世紀に向けたテキスタイルデザイン界の展望

元カネボウファッション研究所代表 上野 昌男

20世紀に於ける我が国テキスタイルデザインの歴史は戦後（昭和21年 西暦1946年）に始まると言っても過言ではない。

古くから欧米を始め資源を持つ世界の国々とは異なり、原料の大半を輸入に頼らなければならない宿命を持ち、絹の着物分野以外にはデザインと言えるものは殆どなかった。

1955年デザイン盗用の問題で英国の要請により、通産の指導のもと財団法人「日本繊維意匠センター」が設立され、意匠保護のためデザインの保全登録や認定業務を行うかわり、テキスタイルデザイナーを育成するため各種講習会や、繊維デザインコンクールの開催、月刊誌カラーデザインの刊行、デザイン資料室の開設など繊維産業の活性化のため次々と新しい事業を推進してきた。

60年代に入り、ナイロンやポリエステルが普及し、所謂化学繊維の時代となりテキスタイルデザインも多種多様な繊維製品に対応するため大きく変化した。

素材の変化と共に、色染めやプリントデザインの様に素材に化粧をつけるものの重要性に加え、先染め後染めを含む織り編みデザインが重要視されるようになる。

この時代は我が国の経済も高度成長の中にあって、新しい素材の開発と共にファッションも合理性や機能性を追求した、また繊維産業各社は企業内に意匠部門の充実を図り、意匠室や企画室を独自に設けデザインの重要性と必然性に対処した。

その後急速なアパレル産業の進展に加え、景気に支えられた住宅産業の発展にもとづくテキスタイルデザイナーの仕事も多種の商品企画から販促企画まで幅広く役割が増え、各種商品に対する豊かな知識と感性に加え高い見識を要求されるようになった。

最初は絵画に近い図案のペーパースケッチを描く能力があれば仕事ができたデザイナーも素材の特性を知り加工技術を取得し、その商品の市場マーケティングを加味したデザインを考え創作しなければならなくなる。



手書きデザインによる打合せ

コンピュータデザインの現場

80年代になるとテキスタイル業界のみならず、あらゆる産業界に於いて情報化時代がやってくる。

同時に産業界のロボット化に伴うコンピュータ技術の発展は繊維業界においてもファクトリーオートメーションの展開に結び付きCAD/CAMなどのシステムが普及し、特にアパレル関係テキスタイルデザイナーの仕事が従来のものとは大きく変わり映像技術との戦いとなる。

ここにコンピュータグラフィック分野の発展と共にコンピュータによるデザイン企画の提案が必要となり、各種デザイナーは今迄にない厳しい勉強を強いられ、テキスタイル分野でもコンピューター化に対応するため人材育成が急務となった。

90年代の初めバブル経済の崩壊後、世紀末のテキスタイルデザインは産業のグローバル化の中でコンピュータ技術の駆使のもとハードとソフトの融合によりデザインの機能化が進む。また個々のデザインの重要性に加え、トータルデザインプランニングが欠くことの出来ぬものとなり生活空間の中でテキスタイルデザインの役割が益々高まって来た。

21世紀を迎えるに当たり、デザイン界はクラフトとコンピュータデザインに分野が大きく分かれるであろう。デザイナーたちは国際的な感覚と豊かな感性を備え、個性化と社会性のある文化の追求を行い、より高度な情報化社会に対処せねばならない。今やデザインは電話回線により世界を駆け巡り、電波で運ばれる時代となりコンピュータによるプレゼンテーションが益々発展すると考えられる。

またインターネットを活用したデザイン企画のビジネスが普及するだろう。

これ等情報化とコンピューター化による市場の変化は今後のテキスタイルデザイナーに対する教育にとって重要な問題となる。

この様に高度化する社会にあってデザイン事業は個々の活動では極めて難しくなり、企業との繋がりを強めることが重要となる。またそれらを支援する国の力が必要となり、所謂官民一体化が進められよう。

新しい美意識にもとづく社会環境企画や生活企画へとテキスタイルデザイナーの仕事はとめどもなく広がり21世紀の社会の発展に寄与して行くものと期待したい。